歴史地理学　47－1（222）107～110　2005.1

総括：宗教文化の歴史地理学における今後の課題

小　田　匡　保

1．地域差，宗教差，時代差の類型化

シンポジウムの最後に，オーガナイザーとして総括を述べたい。

一般に世界の宗教文化の多様性というものを念頭に置くと，そこに宗教による違い，地域による違い，時代による違いというものがあると考えられる。同じ信仰圏あるいは門前町という地理的事象でも，それがキリスト教の場合はどうなのか，アメリカではどうなのか，古い時代はどうだったのか，という疑問が生じる。そういう多様性を乗り越えて，通時代的に世界に当てはまるモデル的なものを追求する作業も必要であろうが，ここではそれらの違いを類型化して整理することの必要性を提起したい。

シンポジウムにおいても，地域による違いに着目したものがあった。渋谷報告は，まさに東アジアにおける「風水」の地域差を論じたもので，形勢学派，原理学派それぞれの優勢な地域があり，また「水口」，「主山・案山」，「脈」という概念がどの地域で強いかという話があった。イギリスの墓地についての稲田報告では，コメンテーターの中川氏の発言によって，同じキリスト教（プロテスタント）地域でも，イギリスとアメリカではかなり状況が異なることが浮き彫りになった。議論にはならなかったが，日本の例を対比させてみれば，また別の違いが明らかになる。小野寺報告でも，伊勢講の形態が東日本と西日本とで違うことに触れられた。このような違いを，地域差だけではなく，宗教差，時代差の面からも探っていく必要があるだろう。

2．欧米の宗教地理学研究

ここで視点を変えて，海外とくに欧米の宗教地理学研究の視点を整理することによって，今日の発表を相対化してみたい。

文化地理学の著名な教科書にジョーダン（Jordan）らの*Human Mosaic*があるが[1]，そこでは周知のように，文化地理学のテーマを5つ挙げている。すなわち，文化地域（culture region），文化の伝播（cultural diffusion），文化生態（cultural ecology），文化の相互作用（cultural interaction）[2]，文化景観（cultural landscape）である。そして，言語・民族・政治・人口・農業など文化地理学のさまざまな分野と同様に，宗教もこれら5つのテーマに従って整理されている。つまり，宗教文化地域，宗教の伝播，宗教生態，宗教における文化の相互作用，宗教景観である。

次に，ドイツの宗教地理学概説書であるリンシェーデ（Rinschede）の*Religionsgeographie*[3]を見てみたい。この本の構成は，前置き，まとめ，研究史的な章を除けば，次の9つの章からなっている。1．宗教の起源・分布・発展，2．宗教集団，3．宗教と自然環境，4．宗教と政治，5．宗教と人口，6．宗教と集落，7．宗教と経済，8．宗教とツーリズム，9．宗教とマスメディア。第9章は，この分野の研究のあるリンシェーデならではの章である。もう1冊，英語の宗教地理学入門書であるパーク（Park）の*Sacred Worlds*[4]では，前置きの2つの章を除くと，1．分布（宗教の空間的パターン），2．伝播（宗教的信念と宗教組織），3．ダイナ

ミックス（宗教の変化），4．宗教と人口，5．宗教と景観，6．聖地と巡礼，の6章からなっている。

これらの教科書に共通するものを筆者なりにまとめると，次の4点である。①宗教分布と伝播，②宗教と環境との関係，③宗教と社会との関係，④宗教景観。換言すれば，これらは，欧米の宗教地理学における主要な研究視角であると言えよう。

3．シンポジウム報告の位置づけ

シンポジウムの各報告がこれら4つの視点のどれに含まれうるかを考えてみると，渋谷報告の風水は②宗教と自然環境との関係に[5]，稲田報告の墓地は④宗教景観に含まれる。岡報告の門前町は④宗教景観に近い[6]。信仰圏は，大きく見れば①宗教分布と伝播に入るであろう。

気がつくのは，③宗教と社会との関係に属する報告がないこと（リンシェーデの本では多くの事例が挙げられているにもかかわらず），小野寺報告の村落内宗教組織が，①～④のどれにも入れにくいことである（もっとも，小野寺報告では宗教的講組織を，地域の経済的・社会的背景との関わりでとらえようとしているから，③に相当すると言えなくもない）。村落の中の地域集団にこだわる日本の村落地理学が，欧米の農村地理学（rural geography）とはかなり異なる内容のものであることは，既に周知であろう。

以上の簡単な整理からも垣間見えるように，英語圏，ドイツ語圏の宗教地理学の範囲と，わが国で行なわれている宗教の地理学的研究にはズレがある。これは，歴史地理学全体についてもそうであって，学問研究には国や地域別の特徴があり，このようなズレがあるのも当然のことと言える。したがって，日本でのみ研究されているテーマに意味がないということではけっしてない。また，欧米の研究動向に追随しなければならないということでもない。しかしながら，海外で研究されていて，日本では研究されていない分野はなぜはやらないのか，研究の価値があるかないか検討してみる必要はあるだろう。

4．今後の課題

上述の欧米の研究動向のうち①～③を受けて，以下には，筆者の考える今後の課題を3点述べたい。

(1) 宗教分布と伝播

宗教分布は戦前からある古いテーマだが，近年は信仰圏の研究[7]を除いてあまりさかんではない。分布は確かにシンプルなテーマではあるが，実は日本における宗教分布自体，意外に分かっていないのではないかという思いが筆者にはある。アメリカ，ドイツでは詳しい宗教分布の地図が作られており[8]，イギリスでも19世紀のセンサスを用いた研究[9]がある。筆者も日本におけるキリスト教や仏教諸宗派の分布について分析を行なったことがあるが[10]，まだ研究の余地が十分にあると考える。

しかし問題は，宗教分布の把握以外に，なぜそのような分布になっているかということである（これは，信仰圏の場合にも当てはまる）。分布の地図化自体は，資料さえあれば誰にでもできる事柄であるが（GISのような技術があれば，より魅力的な地図ができるであろうが），そうして明らかになった分布の説明は簡単ではない。今どき，地形の制約のような環境決定論的説明ですますわけにはいかず，その宗教がどのように発生し伝播していったかをおさえなければ，分布の説明はできない。ここで宗教分布の研究は，宗教史研究に踏み込まざるをえなくなる。しかし，宗教史分野だからと恐れずに研究に参入することが視野を広げることになるし，歴史地理学的関心と素養のある研究者ならば，その能力は十分にあると考える[11]。

(2) 宗教と環境との関係

2つめに宗教と環境との関係を挙げたい。これについては鈴木秀夫の森林的思考・砂漠的思考の議論[12]がよく知られているところであるが，山岳信仰と自然保護との関係を主張する近年の長野覺の研究[13]も，宗教と環境との関係に関わるものである。しかし，日本の宗教地理学的研究には，このジャンルに入るものが少ない。一方欧米では，現代の環境問題に対する意識の高まりを反映しているのか，「環境→宗教」あるいは「宗教→環境」というかつての単純な影響論ではなく，近年ecotheology（直訳すれば「生態神学」）に対する関心が高まっており，*Ecotheology*という学術雑誌[14]が発行されているほどである。ecotheologyとは，ジョーダンによれば「自然環境の改変に対する我々の態度に，宗教の教えや世界観がいかに関わっているかを問う」もので，ジョーダンの本の最新版ではecotheologyのセクションが新設されている[15]。またリンシェーデも諸宗教の環境倫理（Umweltethik）にページをさいているし[16]，国内の宗教実践者の側でも，環境破壊への対処に関する問題意識が強まっている[17]。それぞれの宗教が環境改変についてどのように解釈しているのか，神学的・宗教学的議論が要求されるが（それに加えて，建前と現実の問題もあるが），日本の地理学者も仏教・神道・修験道等について挑戦してみる価値はあるだろう。歴史地理学全般においても，日本では海外ほど環境歴史学（environmental history）への関心が高くないが，環境との関わりの点で展開の余地があると考える。

(3) 宗教と社会との関係

3つめに宗教と社会との関係を挙げたい。これを「宗教→社会(→地域差)」という影響関係で考えると，この種の研究は日本ではあまり見られないが，それはなぜだろうか。1つには，日本は，イスラム教やキリスト教などの各宗派が入り混じる地域に比べて相対的に宗教が同質であり，国内の政治・経済・社会などにも大きな違いがないことが考えられる。もちろん，仏教宗派の相違によって民俗が異なるなどの事例はよく知られており[18]，この種の研究が不可能なほど同質ということではない。2つめには，社会の諸要素の違いを，どこまで宗教の影響に還元できるかという問題がある。上述のように日本社会は相対的に同質であり，そこに見出されるわずかな差異の要因を宗教のみに求めてよいか，慎重に判断しなければならない[19]。しかしながら，「宗教→社会」という単純な影響論に話を限定しなければ，宗教がらみの移住や宗教関連の産業[20]など，日本でも地理学的社会現象に宗教が関与している例はある（ただし，この種の研究は，対象が宗教からは次第に離れていくことになる）。

一方，小野寺報告のように，「社会→宗教」という方向で，すなわち社会的・経済的・政治的要因から宗教現象を追求する道もありうる。歴史学における宗教史研究にもこういう志向性がある。近年の新しい文化地理学も，大きく見れば，社会や政治との関連で宗教現象を扱っている。これらの地域的背景をもとに，空間・景観という視点から宗教史現象を解明する歴史地理学的アプローチがあってよいであろう。ただ，何にでも社会的・経済的・政治的要因を求めることは，最初から「結論ありき」になってしまう。「決定論」に陥らないよう，事実の因果関係をきちんとおさえる必要があると考える。

最後に，シンポジウム開催の準備にあたられた関係者の皆様，発表者・コメンテーター・座長の皆様，そして活発なご意見・質問を出していただいたフロアの皆様のご協力に，オーガナイザーとして厚くお礼申し上げる。また，シンポジウム構成の不十分な点，進行の不手際についてはお詫びしたい。

（駒澤大学文学部）

〔注〕

1) 何度も改訂されているが，最新の第9版は次のとおり。Jordan-Bychkov, T. G. and Domosh, M., *Human Mosaic: a thematic introduction to cultural geography*; 9th edition, Freeman, 2003.
2) これは，第8版までは文化統合（cultural integration）と言っていたものである。
3) Rinschede, G., *Religionsgeographie*, Westermann, 1999.
4) Park, C. C., *Sacred Worlds: an introduction to geography and religion*, Routledge, 1994.
5) ジョーダンの本にも，宗教生態の一例として風水の話が出てくる。前掲注1）p.93.
6) ジョーダンの本では，門前町は宗教とは別の「都市化」の章に含まれている（都市の歴史地理とも言うべき「都市景観の発展」のセクション）。
7) 信仰圏の研究は，管見では，欧米ではあまり見かけない議論であり，ある意味では日本は世界の最先端を行っているのかもしれない。
8) たとえば，Henkel, R., *Atlas der Kirchen und der anderen Religionsgemeinschaften in Deutschland: Eine Religionsgeographie*, Kohlhammer, 2001. Gaustad E. S. and Barlow, P. L., *New Historical Atlas of Religion in America*, Oxford University Press, 2001.
9) Snell, K. D. M. and Ell, P. S., *Rival Jerusalems: the geography of Victorian religion*, Cambridge University Press, 2000.
10) 小田匡保「日本における仏教諸宗派の分布—仏教地域区分図作成の試み—」，駒澤地理39，2003，37～58頁。Oda, M, "Distribution of Christianity in Japan," *The Pennsylvania Geographer*, 37-1, 1999, pp.17-32.
11) 筒井　裕「山岳信仰の神社における講組織の形成」，歴史地理学46-1，2004，32～49頁は，神社所蔵史料を用いて，昭和初期における講社の結成過程を明らかにしており，この方向の一例を示しているものと考える。
12) 鈴木秀夫『森林の思考・砂漠の思考』，日本放送出版協会，1978。
13) たとえば，長野　覺「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持（その1）」，駒澤地理25，1989，51～76頁。
14) *Ecotheology: The Journal of Religion, Nature and the Environment*, Equinox, 1996-. 国立情報学研究所のWebcatによれば，日本国内の大学図書館等に，この雑誌の所蔵情報は見当たらない。
15) 前掲注1）pp.94-97.
16) 前掲注3）S.91-102.
17) たとえば，富坂キリスト教センター編『エコロジーとキリスト教』，新教出版社，1993。
18) 石塚尊俊『民俗の地域差に関する研究』，岩田書院，2002。
19) 中川　正「集落の性格形成における宗教の意義—霞ヶ浦東岸における二つの集落—」，人文地理35-2，1983，1～19頁，にもこのような感想を抱く。
20) たとえば，内田秀雄『日本の宗教的風土と国土観』，大明堂，1971，における仏壇の研究。

Conclusions: Future Issues in Historical Geography of Religious Culture

ODA Masayasu (Komazawa University)

At the end of the Symposium on Historical Geography of Religious Culture, the author/organizer proposes the need for Japanese geographers to pursue the issues as follows: firstly to identify the types of difference by region, religion and time; secondly to ask how and why religions have been distributed in cooperation with the historians of religions; thirdly to make clear how Japanese religions interpret the environmental modification; and fourth to grasp religious phenomena in light of social, economic and political situations in the region.